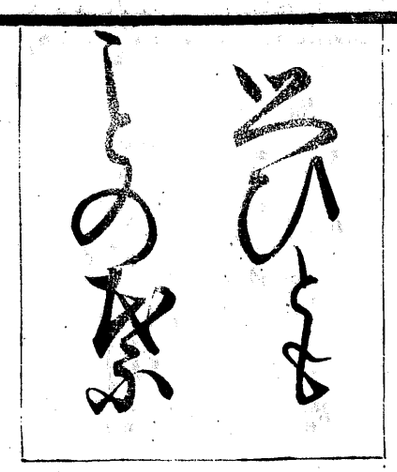
同銭文めりやす次の唱歌

星びらき　本調子

「桜そろうとれはそれかひろまへばおひの地火ちぢむきねの節の絵さへ
ちゞれあまいのさゝをひきて絲やさつまごれつれ人をまごよそれはさへ
そあれあそれ色そうちもあゞどをわる有つめ々客のひざ帯
さけそやどけて絲ゞまごとのつげのはげの花を榜も乱が涙やぞろく
袖ふとぞまて袖ふ寄の玉のうたつとあとぞまて袖ふつくまれ
ぐのうたつとわ

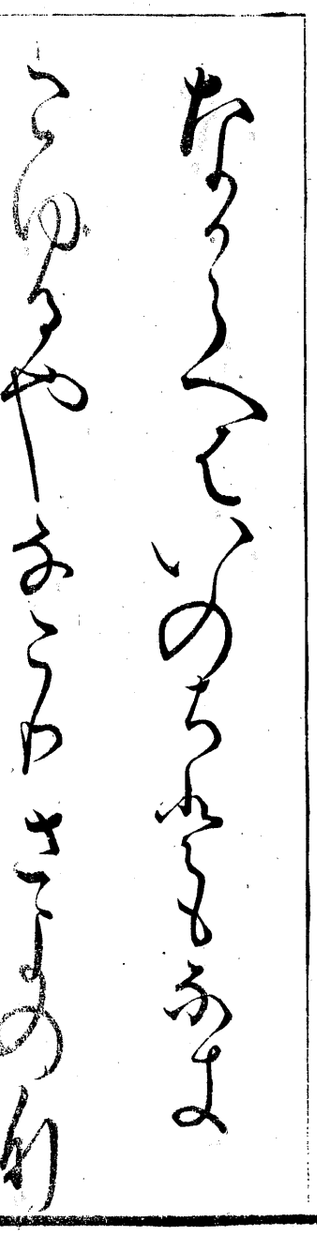
右に載する酒盃あらびはめりやすの唱歌ハ伏見の撞木町なる娼家
笹屋清右衛門がかしこに遊びて夕霧といへる妓に馴染て別れに天
井に辞書せしころの戯作とぞおもはるそれ以前九里ふて墓碑
子どもに絵をさせてかりしをのこせり天井に辞書せし感慨の辞
八巳に一夕話に出しつ
大石主税の書なり

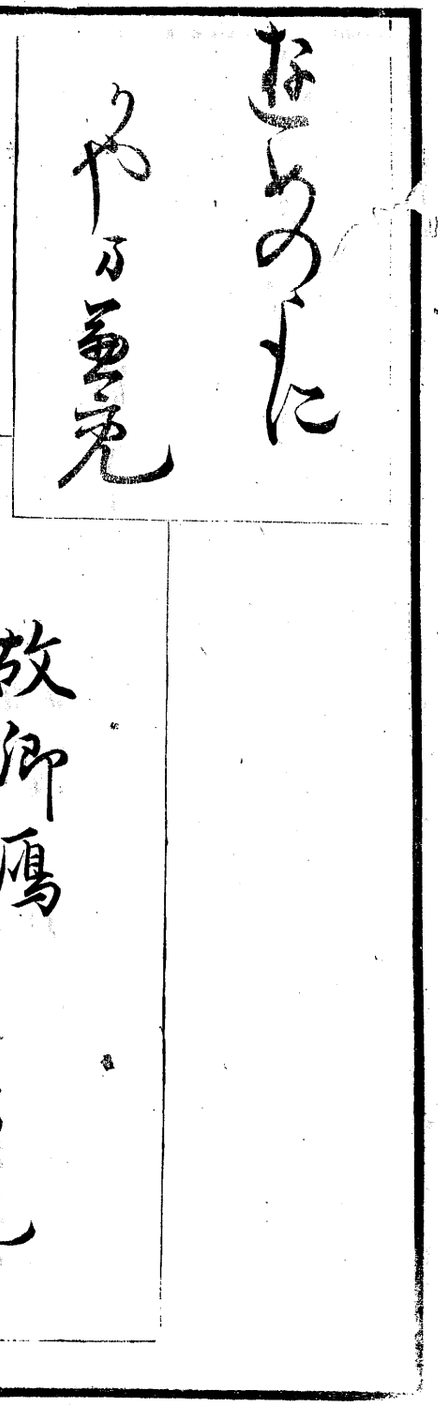
あきとさいかなりつく
はらうれふ分らいのる



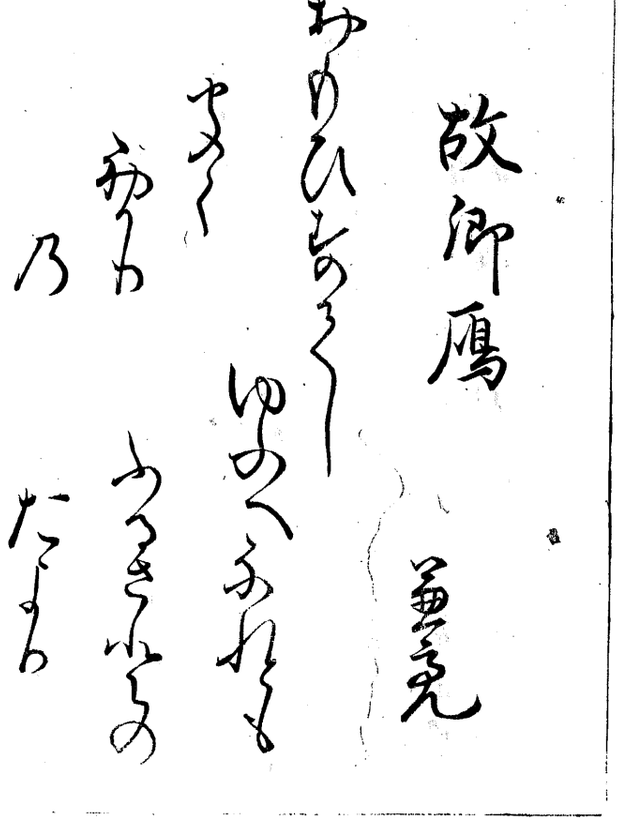
元八小野寺秀和のよめる哥ども
を拾ひ書を著するよりて代筆を新
し義師の書付をもつてしるす

高義亮の歌





故御鷹　義亮



岡番市樹の経刀鎗

岡番市樹ハ八十九郎の父なる侯の藩士なりしが有て牢人し武蔵国に住して興力を百出され年八十九にして死せり其の子二人ありて共に武蔵国に住す市樹ハ赤穂侯に仕へ元禄年末赤穂の変に諸士の中義挙に志しあるを以て復仇を志す八十九郎も盟に加はりて剛勇の士なりき

あり一夕諸人詩を詠ず一つさて復仇を遂て暁に芝泉岳寺に退くの附世間の噂を吟て見の武蔵国のもとに人ず詠け出て芝の塩留橋に至りおひつき泉岳寺まで行て別るのごとく八十九郎形見として服着を勝る浴衣ありて後貝十郎左衛門に贈り血のつきたる弁神をおくりあとを死武蔵国に赴よいい侍へるところよりて人々みるの形見の品を蔵せり平ら義士伝を編集するに吟て重宝の

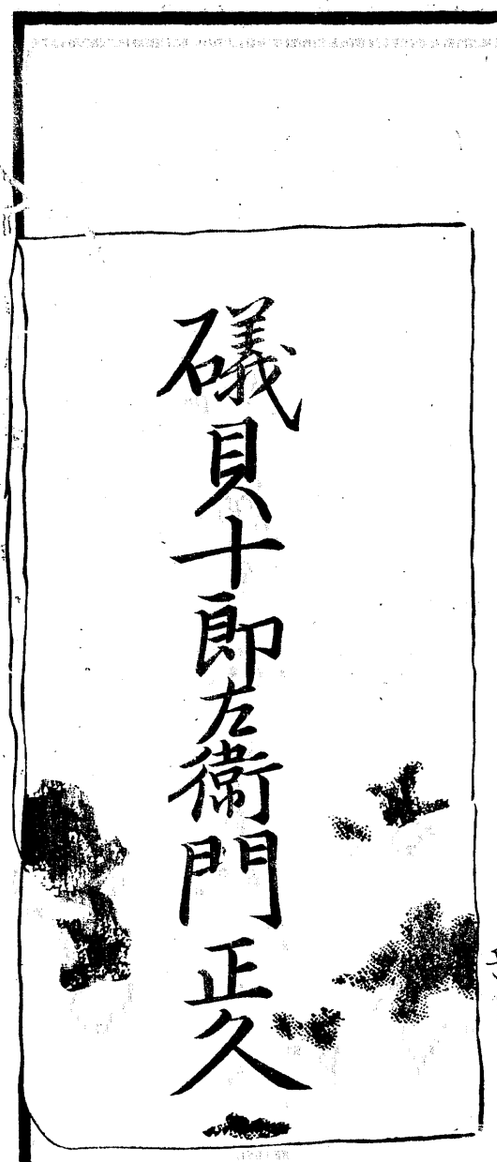
長番林左衛門ハ赤穂より帰るこのあるとして友人江口忠右衛門その事を墓碑に載せおくれるを載せり

文明二年八月日

備前国住長船祐定

同鎗の穂

長番市樹復仇の附暁に退く屋なる面向院の門前に大高原五郎屋にて酒飲するとて持る鎗をそのまゝ軒に立かけおきて捨るを酒屋に侍へる松義す今八酒屋と家号を称ず



磯貝正久の斤袖　血一き

穂の長さ八寸ばかり柄八打てなし

若の血統よりあるべき落ハ赤穂よりつきて伝ちれり

磯貝十郎左衛門正久が袖ハ丈一尺三寸二分幅八寸但縁及ばり白き麻布

ゆくゆく血つきてあり

按ずるに右の長刀長曲林高の家よりいひ伝へるよりあり右ハ

も室鳩巣の義人録三宅観澗の烈士報讐録ハ何れも記しきもの

ゆく詳とすべし二書ともに元禄の事柄ハ原来元禄の頃出て長

曲の家と副ぐといひ磯貝十郎左衛門を打平与左衛門と云人の家

士小て内義万左衛門の子を協議弥兵衛が吹挙よりて赤穂よ

仕へしと協内伝左衛門書ることなれバ家伝ことなれ号非を

ゆくず

赤穂義士隨筆　巻之二

210.5
2

義士傳 卷三

赤城藩雅集

秋

210.5

赤穂義士隨筆　巻之三

目録

義士四十六人の像
同　真蹟姓名
同　分限帳
同　變名異同考
同　江戸の隠棲

菅氏所蔵

帝國圖書館藏書

登記番号
51119
昭28.3.31
寄贈
帝國圖書館

赤穂義士隨筆巻之三

義士四十六士畫像

義士四十六人の畫像を泉岳寺紫野の瑞光院にあるところのものと正像とこれを正しとするよしハ後仇の子義士四家に諸侯小少預けとなり四五年二月四日自裁を賜ふその四侯中に絵鳥に形狀を摹すところ不一それ像と併せて二幅ら一幅ら おのゝ二十三人を名ゞゝ有るを細川家の藩士その畫像を二幅に掛わたして席の殆光院に贈まるあり四れバ面目毛髮 小こゝ四まで毫厘も違ふことなゝこれやまとよ四人の畫像と いつくきものゝ有りさて今ここに載る後仇の夜に出たる衣服 名ゞゝるものゝ義士十七間只小當主る時ある人のゝねて義士

墓用の扶布衷甲嚴猛の形狀を墓して寄附せんと志すものあり〜がそれ孫のいまゞ成らざる中を斧爲冰岡子の赤城義臣傳たやく已を成るをすてその移光院まあるところれ正真の像を扶布衷甲墓用を墓して奉首を載うゝ〜あり

按ずるに大石良雄が組二十四人と東組ゝ合不八曹の前立を読ふいの字よりちの字すでに名三人を一まうして假名を左文字を去るこれを大字と定む又西組二十二人その形を大石主税あるりの字よりよの字までを同じやうを太文字をあゝこれを擬字と定むさて長瀬を切て書ゝ代へ斧撑を槌をのゝ抜ゝ彩を列とゝ良雄金圓の糸を直を枚とゝ〜ゝふこれを呼ませ対ゝてひゝ〜ゝ五を收めよゝの下知をり

巖々大石維精維忠
義起赤城氣貫白虹
夜襲仇家忽顯捷功
採麾之將歃血之衆
昔者豫讓今也良雄
刺衣遂志得首報公
千歳孰比常變時中
父子從弟壹皆致躬
視死如歸有始持終
克使天下凛慕遺風

白首蹈白刃
赤城標赤心
終遂復讎志
忠勇冠古今

九山盟會
衆議已完
共功報羣
易水風寒

嗚呼義母
勵兒與衣
彩子一去
殺身不歸

家譜曾聞自大明
勇功不恥武林名
古今壯志誰相似
髣髴子由亦結纓